



児童指導員

■ 下志津病院

療育指導室主任児童指導員 稲澤淳一さん



家族と面談する稲澤淳一主任児童指導員（中央）＝千葉県四街道市

児童指導員は主に重症心身障害、筋ジストロフィー、小児慢性疾患で入院している患者さんとその家族を多方面から支えています。今回は下志津病院の稲澤主任児童指導員にお話をうかがいました。

児童指導員といっても、児童にとどまらず、障害者総合支援法や児童福祉法などに基づき入院しているあらゆる年齢の患者さんの生活と福祉を支えるのが仕事。社会学・教育学・心理学・社会福祉学を基盤として、患者さんの発達保障、社会生活、身体面・精神面を総合的に支援するとともに、療育（治療と教育）を提供しています。

「患者さんの中には、重度の知的障害と身体障害により意思表示が難しい方もいます。そのような方を支えるために、福祉制度にからむ部分ではエキスパートでなければいけないと思っています」

日常の仕事を具体的にみると、患者さんの生活支援にはじまり行事や療育活動、家族の支援、在宅支援、行政機関などとの対外交渉など。加えて患者さんに提供する療養介護サービスのサービス管理責任者としての業務もあり、患者さんとの面談、個別支援計画の

立案、会議の運営と一言では言い表せないほど多岐に渡ります。

「自分で意思を伝えること、身体を自由に動かすことが難しい患者さんの自己実現をどういった形でサポートしていくかは、非常に重いテーマだと思います。児童指導員は、医療現場で他職種と連携しながら患者さんの人生を家族とともに支えていく仕事ですから」 児童指導員として常に考えていることは「いかにして、患者さんとその家族のQOL（人生の質）を高められるか、それに尽きます」と明快です。

「例えば、好きなものを食べたくても嚥下障害で難しいなど、患者さんが不自由を感じることは少なくありません。その際には医療スタッフと連携し、どこまで実現できるのかを腰を据えて話し合います。いわば患者さんの代弁者であり、医療スタッフや行政などとの橋渡し役です。何か困ったことがあったときに、まず児童指導員に相談しようと思ってもらえる存在でありたいと思っています」

今年1月18日、四街道市長や特別支援学校校長らを迎え、患者さん3人の成人祝賀会が療育訓練室で開かれました。児童指導員と保育士ら療育指導室のスタッフが中心となって運営し、稲澤さんが司会を務めました。成人を迎えた患者さんは着付けボランティアに着物を着せてもらって、晴れ着姿でご家族とともに式典に参加しました。

「患者さんの晴れ姿と家族の喜ぶ姿を見て、とてもうれしく感じました。『まさか成人の日を迎えられるとは…』と涙ぐむご家族に接し、思わずもらい泣きをしてしまいました。まちがいなく、患者さんが主役になった一日でした」

「一人ひとりをより大切に、人生に寄り添って支援していくことが児童指導員としてのやりがいであり、病院で生活する患者さんや、そのご家族にとって必要なことではないでしょうか」。こう穏やかな表情で話していただきました。

（下志津病院＝千葉県四街道市）